



揚子江の南

阿部 健一*

貴州省には10日余り滞在したが、とうとう1日も晴れなかった。いつも霧だか雨雲だかが低く垂れこめ、道はぬかるみっぱなしだった。おまけに町は石炭粉で煤けて薄汚れていた。暗くて陰気なところだ、とまず思った。

うら寂しく感じたのは天候のせいばかりでもない。上海からずっと同行してもらっている陸さんは、「貴州は貧しいところです」としきりにいう。州都貴陽にあった中日合弁のアルミニウム会社に通訳としてしばらく勤めたことがあるそうだ。「5年前です。当時は何もなかった。本当に食べるものもなかったんですよ」。今でも、貴州は貧しい州の一つらしい。

苗族の村を訪ねた。貴陽から東へ200 km、台江県の県城からさらに30 km離れたところにある。案内してくれた県のお役人は、「貴州で最も遅れた村です」と説明した。貧しい省の中の貧しい村に行く。

この村にはおわんを伏せた形の山の間を



貴州の苗族

ぬってゆく。山はどこも棚田になっている。棚田には水が張られている。ゆるやかな曲線の重なりを、車の中から飽かずに眺めた。稲の収穫がおわった後、養魚を行なっているらしい。稚魚の隠れ場所として松の枝を水の中に漬けている。

あらかじめ連絡がいていたので、村の人が踊りとお酒で迎えてくれた。客は村に入る時出る時、また家に入る時出る時も、お酒を飲むしきたりになっている。藍染の服を着た家主のおじさんが、ひょうたんからついでくれた酒を飲み干すたびに満足そうな顔をする。何やらうれしくなってすすめられるままに何杯も飲んだ。

木造りの2階建ての家は立派だ。杉の皮でふいた屋根が雨にぬれている。軒下にはサツマイモの葉が干してある。階下には大きな豚を飼っている。知らずに入ってびっくりした。

集落の裏の斜面に木が残っている。密な林ではないが一かかえ以上もある大木がある。樟があるだろうと思ったが、松・楓・広葉杉が多かった。下には小さなリンドウの花がさいている。

青い空の下で焼畑をしていた北タイ山地の苗族の村を思い出しながら村の中を歩いた。

今回は3カ月中国にいた。行った先を地図におとしてみると、揚子江の南、中国の南半分の広い範囲を回ったことになる。おもに、百越と総称される人が住んでいたところだ。苗族も百越の一つと教えられた。

百越という呼び方は、多くの民族要素を含んでいて専門的にはあまり意味をなさないらしい。しかし民族的起源や系譜を異にしながら

* Ken-ichi Abe, The Center for Southeast Asian Studies, Kyoto University

ら、同じ暖温帯の常緑林の山と谷を生活の基盤とする人々が、大陸部東南アジアの山地まで拡がり、それぞれ小世界を形成していた、そう理解する時、門外漢にはわかりやすい言葉だ。

今ではこの地域、雲南・貴州など少数民族の多い省を含むとはいえ、断然、いわゆる漢人の方が多い。歴史的には、唐末から、浙江・江蘇省など人口の多かったところから、百越

を南へ山へ追いやりながら移住してきた過程があるらしい。

漢人の素晴らしく合理的な資源利用と圧倒的な人の多さ、どちらも徹底した環境破壊を結果するのだが、その力強い堅牢な生活様式の前に、皮相的な見方だが、苗の人たちはあまりに弱々しくナイーブに見えた。

(京都大学東南アジア研究センター助手)